

「十五年戦争」と「アジア太平洋戦争」の 呼称の創出とその展開について

安井 三吉

1945年8月、日本は、日中戦争、アジア太平洋戦争そして第二次世界大戦という三つの複合的な戦争を戦って敗北した。敗戦から70年、日本では戦争中の個別的事件や問題だけでなくそれが侵略戦争か否かという戦争の基本的性質をめぐってもいまなお議論が続いている。ここでは、日中戦争研究の基礎的問題にかかる次の3点、特に「十五年戦争」と「アジア太平洋戦争」の呼称の創出とその展開について私見を述べ、ご批判を仰ぎたい。

(1) 日中戦争の基本的性質と個別事件の評価について。日中戦争に関する学術交流を建設的に進めるには、戦争の基本的性質（日本の侵略、中国の抵抗）に対する認識と個別問題の評価との関係についての一定の了解が必要である。ここでは盧溝橋事件研究を例に考えてみたい。なお「日中歴史共同研究」（2005-2009）はこの点に関して一つのモデルを示した。

(2) 「十五年戦争」という呼称について。1950年代半ば、この呼称を提唱した哲学者鶴見俊輔の意図と、1980年代にこの呼称を広めるうえで大きな役割を果たした日本現代史研究者江口圭一の仕事について振り返っておきたい。

(3) 「アジア太平洋戦争」という呼称について。1980年代半ば、前後してこの呼称を提唱し、広めた中国近代史研究者副島昭一と日本現代史研究者木坂順一郎の主張とその意図について検討する。

むすびとして、日中の「和解」への道に関する一つの示唆として、1960年6月、北京で行われた陳毅副総理と日本文学代表団（団長野間宏）との会見について思い起してみたい。日中「和解」への道を考えるうえで一つのよい参考になると思われるからである。

(I , II 略)

III 「アジア太平洋戦争」の呼称の提唱と普及—副島昭一と木坂順一郎

1941年12月8日から1945年8月15日（あるいは9月2日）までの日本と連合国との間の戦争を何と呼ぶのか、「大東亜戦争」か、あるいは「太平洋戦争」か、それともこれら二つに替るより適切な呼称はないのか。この問題に関連して日本の歴史学界では1980年代半ば「アジア太平洋戦争」という新しい呼称が提唱された。

この「アジア太平洋戦争」という呼称は、1984年12月に中国近代史研究者副島昭一が提唱し、翌85年、日本現代史研究者木坂順一郎が支持を表明、「アジア・太平洋戦争」として採用し、その後歴史学界を中心に一般にも広まった。本節では、「アジア太平洋戦争」という呼称の提唱、普及の経過を振り返り、その背景と意図について検討する¹⁵⁾

15) アジア・太平洋戦争という呼称の活字化の最初は、柳沢英二郎・加藤正男（1985, p. 11）の小見出しであるが、副島が指摘しているように同書にはなぜこの呼称を使うかについての説明がない。なお、柳沢は、1984年1月24日付の信夫清三郎への書簡のなかで、信夫の見解を批判して、

1983年8月、信夫清三郎は雑誌『世界』(第453号)に論文「「太平洋戦争」と「大東亜戦争」」を発表して、家永三郎『太平洋戦争』(岩波書店、1968年)、歴史学研究会編『太平洋戦争史』(青木書店、1971-73年)、木坂順一郎『太平洋戦争』(小学館、1982年)が「大東亜戦争」の呼称は侵略を正当化することにつながり不適切で使用しないが、他方で「十五年戦争」という呼称がまだ一般に浸透していない現実を考慮して、米英との戦いを主とし中国との戦いを軽視するという点で不十分な「太平洋戦争」という呼称を「次善の方法」(家永)、「便宜的」(歴研)、「従来から一般化している」(木坂)という理由でやむなく著書に使用することにしたという点を取り上げ、このような態度は歴史家として「怠慢」「怯懦」だと批判し、そして自らは「大東亜戦争」の呼称の使用がただちに日本の侵略を正当化するものではなく、「戦争の実態を最も広く蔽うるものとして「大東亜戦争」の呼称を用いている」と主張した。これに対して11月、斎藤孝が「「大東亜戦争」と「太平洋戦争」—歴史認識と戦争の呼称」(同誌、第456号)を発表し、「大東亜戦争」という呼称は占領軍の指令がなくても「日本国民自身が否定すべきものであった」とし、「第二次世界大戦」か「太平洋戦争」でよいと主張した。いわゆる「信夫・斎藤論争」である。

この論争に先行して、家永三郎は「日中戦争についての中西功の書簡」において自著『太平洋戦争』をめぐる中西功との往来について説明するとともに中西の家永宛て書簡(1972年1月9日付)を公表した(家永、1983)。その書簡において中西は戦争の呼称に関して、国際的な反ファッショ統一戦線を重視する立場から「第二次大戦—アジア・太平洋戦線」という呼称が妥当であるという考えを提示していた。

1) 副島昭一は、1984年12月、大阪歴史科学協議会の研究会で、「日中戦争と太平洋戦争」と題する報告を行い、その中で「アジア・太平洋戦争」という呼称を用いるよう提起した。副島は、この報告を1985年11月発刊の『歴史科学』(第102号)に「日中戦争とアジア太平洋戦争」と改題し、論文として発表した。この論文において副島は、中西の見解を「基本的に支持」するとしたうえで、「アジア太平洋戦争」という新しい呼称を提唱した。すなわち副島は、第二次世界大戦をヨーロッパ戦線とアジア・太平洋戦線によって構成され、そのアジア・太平洋戦線はさらに中国戦線、東南アジア戦線、太平洋戦線に区分される。その範囲は「大東亜戦争」の範囲と同一だから、「大東亜戦争」に替えて「なおかつこの戦争が第二次世界大戦の一環であることを示す」のには中西の提起した呼称が正しいが、日本帝国主義が遂行した戦争という点を明示するには「アジア太平洋戦争」がよいとした(副島、1985, p. 23)。なお後に副島は、1984年の報告では「アジア・太平洋」としていたのを文章化に際して「アジア太平洋」に改めた理由について、アジアの戦争と太平洋の戦

「日本にとっては、日米戦争はアジア（東南アジアを含む）勢力圏確立の手段でありました。……したがって、「アジア・太平洋戦争」という呼称が、国際政治史上もっとも適切だと思います」(木坂、1993, p. 43)

と書いていたが、この書簡が公表されるのは1993年、木坂(1993)による。

争、アジア戦線（とくに中国戦線）と太平洋戦線とが反ファシズム戦争の一環として緊密に結びついていたことを明示するためだったと説明している（副島，1991，p. 2）。副島はまた、

「十五年戦争史観によって、中国以外も含むアジア全体にたいする戦争責任を基礎づけるのは無理であろう。「太平洋戦争」が対米戦争ではなく、アジアにたいする戦争と一体であった、すなわちアジア太平洋戦争であったととらえることにより、アジアにたいする戦争責任が、より明確に表現できるのではないだろうか。」（同前，p. 5）

と述べ、中国だけでなくアジア全体への戦争責任を明確にする必要から「アジア太平洋戦争」の呼称を提唱することの意義を改めて主張した¹⁶⁾。

2) 日本現代史研究者木坂順一郎は、1985年8月、「『大日本帝国』の崩壊」（木坂，1985）において、副島の先の提唱を支持し、さらに「大東亜戦争」と太平洋戦争という二つの呼称を「回避し、あえて「アジア・太平洋戦争」という名称を提唱」する理由について、次のように述べている。

「東アジアと東南アジアおよび太平洋を戦場とし、第二次世界大戦の一環としてたたかわれた戦争という意味と、日本が引起こした無謀な侵略戦争への反省をこめて、この戦争を「アジア・太平洋戦争」と呼ぶことにしたのである。」（木坂，1985, pp. 338-339）

木坂は、1987年7月、京都大学で行われた「蘆溝橋事件50周年日中學術討論会」において、「15年戦争の性格と戦争の呼称について」と題する報告を行ったが、これは1988年9月、『日中戦争と日中関係—蘆溝橋事件50周年日中學術討論会』（原書房）に収録され、公表された。木坂は、この論文に修正加筆して「アジア・太平洋戦争論—戦争の呼称と性格をめぐってー」（木坂，1988）を書き、さらに以上の諸論文を総括したものとして「アジア・太平洋戦争の呼称と性格」（木坂，1993）を発表している。木坂は、これらの報告と論文を通じて「信夫・斎藤論争」および中西功書簡と先のシンポジウムでの副島報告を引用しつつ、古今東西の戦争の性格と呼称を詳細に検討したうえで、「アジア・太平洋戦争」の呼称が適切だと重ねて強調した。なお、木坂は、「アジア太平洋戦争」としないで「アジア・太平洋戦争」としたのは、「アジア戦線のもつ意味を強調する」（同前, p. 73）ためだったとしている。なお木坂も江口が「十五年戦争」の呼称について行ったように、「アジア・太平洋戦争」という呼称を教科書や辞典のなかに広めるうえで大きな役割を果たした。

3) 江口圭一は先述の一般市民向けの『十五年戦争小史』においてあえて「十五年戦争」というタイトルをつけるとともに、さらに副島・木坂の考えを承けて「アジア太平洋戦争」

16) 副島は、日中戦争から「アジア太平洋戦争」への拡大の要因としての中国の役割と「アジア太平洋戦争」と第二次世界大戦における中国戦線の位置についても検討を加えている。特に後者については、吉田裕・纁織厚（1989）の「地域別陸軍兵力」「臨時軍事費地域別年度支出額（日本本土をのぞく）」（p. 106）を引用して、「アジア太平洋戦争における中国戦線の比重、および南方・太平洋戦線の相互規定性」がより明確になったとしている（副島，1991, p. 6）。

という呼称の使用を表明した。江口が「十五年戦争」と「アジア太平洋戦争」という二つの呼称を採用すると表明したことは、この二つの新しい呼称を歴史研究者や歴史教育者だけでなく一般社会に広め、浸透させていくうえで重要な契機となった。これは、日本現代史研究者としての江口の位置の大きさによるものといえる。

1980年代後半以降、江口以外にも吉見義明『草の根のファシズム 日本民衆の戦争体験』(東京大学出版会、1987年)のように「アジア太平洋戦争」という呼称を用いて戦争史を分析し、叙述するものも現れ、さらには、森武麿『日本の歴史20 アジア・太平洋戦争』(集英社、1993年)をはじめとして、吉田裕『アジア・太平洋戦争』(岩波新書、2007年)のように書名そのものに「アジア・太平洋戦争」の呼称を用いるものも現れ、またこの呼称は、成田龍一他編『岩波講座 アジア・太平洋戦争』全8巻(岩波書店、2005-2006年)のように講座全体のタイトルにも使われるようになってきている。ただし、このシリーズでは、「アジア・太平洋戦争」を狭義には1941年から1945年、広義には1931年から戦後の冷戦期までと二通りに用いている。また、和田春樹他編『岩波講座 東アジア近現代通史』第6巻(岩波書店、2011年)では、タイトルに「アジア太平洋戦争と「大東亜共栄圏」1935-1945年」としながら、個々の論文のタイトルとしては「アジア太平洋戦争と「大東亜共栄圏」1935-1945年」と「日中戦争と「大東亜戦争」」などとあって「アジア太平洋戦争」と「大東亜戦争」とが合わせ用いられている。戦後70年の2015年秋には、吉田裕・森武麿・伊香俊哉・高岡裕之編『アジア・太平洋戦争辞典』(吉川弘文館)が公刊され、「十五年戦争」、「アジア・太平洋戦争」についてそれぞれ笠原十九司、吉田裕による簡潔な説明が収録されている。他方で高等学校の歴史教科書における「十五年戦争」と「アジア太平洋戦争」の呼称の普及度はまだそれほどとはいえない状況にある。「アジア・太平洋戦争」は日本史A全7種のうち5種、日本史Bでは全8種のうち4種に出ており、「十五年戦争」はAでは4種、Bでは3種に出ていたが、世界史Bでは、「アジア・太平洋戦争」は全7種のうち4種に出ていたものの「十五年戦争」は残念ながら零である(全国歴史教育者協議会、2014a, 2014b)

さて庄司潤一郎は「日本における戦争呼称に関する問題の一考察」(庄司, 2011)において、「大東亜戦争」、「太平洋戦争」、「15年戦争」、「アジア・太平洋戦争」の四つの呼称について、それぞれの呼称の誕生の歴史的経緯、問題点、新聞・雑誌などの使用頻度について詳細に検討を加え、その結論として、

「(1941年)12月8日以降の中国戦線を含めた戦争の適切な呼称は、戦争の全体像の視点から、いずれもイデオロギー色を否定したうえで、「大東亜戦争」もしくは「アジア・太平洋戦争」の使用を検討するのも一方法ではないかと思われる」(p. 80)
と概括している。

このように庄司は、今日もっとも使用されている「太平洋戦争」に替るものとして「大東亜戦争」と「アジア・太平洋戦争」の二つを今後の検討対象としてあげている。「アジア太平洋戦争」という呼称は、1980年代半ばに歴史研究者によって提起されたもので、まだ日が浅い。この呼称が今後どのような広がりを見せるのか、「十五年戦争」という呼

称の展開とともに注視して行きたい¹⁷⁾。

(「おわりに」 略)

17) なお、「大東亜戦争」という呼称を用いる人々の中には、当時の日本政府・軍部の主張を肯定し、アジア解放の戦争ととらえる人もおれば、中国に対する侵略戦争だったことは否定しないが、東南アジアに関しては植民地からの独立に寄与した側面もあった、あるいは当時の状況を忘れないためにもあえて使うという人もおり、その場合「大東亜戦争」と括弧して使うという人もいて一括することはできない。また、「十五年戦争」の呼称は、中国を主たる対象としている点、1931年9月を起点しているという点、「日中十五年戦争」ともいうようにもっぱら日本と中国との戦争を示す呼称として用いる場合と、満洲事変、日中戦争、「アジア太平洋戦争」というように「アジア太平洋戦争」を含めて使う場合と二通りの用法がある。この点で、「十五年戦争」という呼称は、「大東亜戦争」、「太平洋戦争」、「アジア太平洋戦争」という呼称とは区別して論ずる必要があろう（木坂，1993, pp. 46-50, 庄司, 2011, pp. 53-58）。